

第2回魅力ある県立学校づくりに向けた懇話会について

1 開催日時・場所

令和3年10月12日（火） 10:00～12:00
於：教育委員会室

2 出席委員

鳥丸委員，萩野委員，廣瀬委員，前田(晶)委員，山本委員，
久永委員，福留委員，岩越委員，前田(光)委員，川島委員，
太田委員（全委員出席，山本委員はオンライン参加）

3 議事の内容

(1) 委員による提出資料の説明

- 前田晶子委員が、鹿児島市の調査を使い、保護者の年収により大学進学までの希望率に差があることを説明
- 岩越委員が実施したアンケート調査について説明
 - ① 進学する高校を選択する時に重視すること
(1位；進学率, 就職率 2位；合格の可能性 3位；通学の便利さ)
 - ② 知りたい情報
(1位；教育内容 2位；部活動 3位；卒業生の進路状況)
- 山本委員がICTを使った教育の方向性について説明
1人1台の情報端末環境は必須。教室と教室をつなぐ時代からICTにより個々がつながり、どこからでも多様な学科を自律的に学べる時代となったことなどを説明。

(2) 協議・意見交換

① 魅力ある高校について

- 高校の魅力は、生徒、保護者、地域の方にとって異なると思うが、総合的に考えると、「自分が卒業したことを誇りに思える学校」が魅力ある学校といえるのではないか。
- 地域に根ざした高校が魅力ある高校だと思う。

- 学校のカリキュラムや様々な学習に子どもたちがより積極的に関わられるような魅力ある学習を用意することが重要。
- 生徒が、「将来、自分は、社会に受け入れられ社会に参画できる」という自信を育てることができる高校が魅力ある高校。
- 現在の県立高校は充足率が低い学校が多いと聞いているが、魅力がないわけではない。少子高齢化が進む中では、魅力化しても必ずしも充足率が上がるとは限らない。地域の高校については、時代背景や環境など含め、高校はどうあるべきかということ、生徒・親・教師・地域で語ることが魅力につながるのではないか。
- 魅力ある高校とは、生徒が関心を持つ学校、生徒が自分の居場所を感じられる、安心できる場所と考える。
- 高校を卒業した後の出口がしっかりと中学生・保護者に見える学校、楽しさ・部活動など条件がある程度揃っている学校、高校生が日々生き生きと学校生活を送っている姿が地域の人々から見えている学校、将来の地域の担い手としての学びが実践されている学校が魅力ある学校と考えている。
- 先生が、自らの職場として誇りをもてる学校が魅力ある学校ではないか。
- 学校の教育活動に、保護者・地域の方が参画したいという雰囲気があり、それが地域づくりにつながるような学校が魅力的である。

② 中山間地域や離島にある高校の魅力化

- 地方は移住に力を入れているが、ICT環境が整備されていないと親の選択肢から外れる。中山間地域や離島にある高校の魅力化には、遠隔授業などICTを活用した取組を早急にする必要がある。
- 遠隔授業を進めていくためには、まずは、生徒用機器を1人1台の整備を進めた上で、先生が、デジタル技術をどう取り入れていくのかが必要。ICTの活用には、民間企業の力を借りて活用を進めるべき。

- 生徒が色々な情報発信をしており、このような学びが今後の教育に生きていく。ICTを使って学ぶ機会を作っていくのが大事。
- ICTを活用してグループ化やキャンパス化することで、地域に学びの場が残り、さらに離島などでも学びたい学びをICTで受けられるのはありがたい。
- ICTは中山間地域や離島等における教育の機会均等につながる良い取組になるが、国からは「同時に授業を受ける生徒数は、原則40人以下とすること」などが付されているので、見直すよう国に要望すべきである。
- 離島の小規模校では、遠隔授業での対応しかできないため、離島優先でICTを整備するやり方もある。
- 地方創生の核として、地域に学校を残していく価値を考えていかなければならない。
- 地域に学びを確保するためには、小規模校でも学校を残すべきではないか。
- グループ化など学校間連携をする場合、「普通科と普通科」という同じような学びを連携する方法と、「普通科と専門学科」という異なる多様な学びを連携する方法があり、狙いを持った検討が必要。
異質な(学科が違う)もののそれぞれの良さを生かし、交流が進めば、生徒だけでなく先生方にとっても学科の垣根を超えた専門性の広がりにつながる。
- 人口減の中で、ICT環境の整備は必須。先日の新聞記事でもあったように、離島にいながらこれまでできなかった体験ができるというのは、子どもにとってすばらしい経験。
- 北海道の例で、帯広畜産大、北見工業大、小樽商科大が業務提携を結んだ。このように異業種(異学科)が連携する仕組みは、鹿児島はしやすいのではないか。例えば、農商工連携。
- 通学の利便性を考えたとき、都市部はともかく、地方においては通学に対する何らかの支援が必要ではないか。

- 中学生のアンケートで、通学の利便性が上位に来ていた。対面での学びは、オンラインが進んでも、必要である。通学手段については、例えば買い物弱者や過疎地の交通サービス向上のために自治体が巡回バスを出したりするなどの支援に乗じて、合わせ技で何かできないか。他の地域課題と絡めて議論が進めばという感じである。
- 他県の取組として示されたグループ化、キャンパス化、ICTを活用した遠隔授業のどれか一つの方法だけを用いるということではなく、複合的に取り組むことが必要ではないか。
- これまでにない取組が示されたが、教員の負担も生じると思うので配慮が必要。
- 地方の小規模校は、何もしなければ衰退するだけ。グループ化は連携強化、キャンパス化は経営統合、いずれにしろ、必要なのはICTインフラの整備。鹿児島は農業高校も商業高校も工業高校もある。それらの組合せは鹿児島はしやすく、そこから高校生ならではの新しい発想が出てくるのではないか。
- これからの高校教育においては、教科指導だけではなく、地域連携などの新たなサービスが求められることになる。新しい教育サービスを進めていただければ、ありがたい。